

●シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦

ソ連軍との交戦とシベリア抑留記

ソ連軍との交戦とシベリア抑留記

熊本県 西川 勝

私の略歴

昭和十九（一九四四）年二月、福岡県立旧制嘉穂中学校卒業後、満州国奉天省本溪湖市本溪湖煤鉄公司（後に三社合併、満州製鉄株式会社と改称）に入社。昭和二十（一九四五）年二月、現地に年齢繰り上げ徴兵検査。同年五月、東満総省綏陽県綏南の第八四八部隊に入隊。六月、穆稜^{ボクリマウ}において陣地構築（満州第一五二三部隊と改称）。八月九日、ソ連軍越境侵攻のため交戦。

昭和二十年八月九日、早朝から陣地構築に励んでいた時、ソ連軍が越境侵入したとの知らせで、急遽^{きょと}軍装を整え戦闘配置についた。翌日、ソ連軍は重戦車を先頭に怒濤^{どとう}のごとく進撃してきた。友軍は弾薬も兵器も少ない。道路両側の丘で迎撃するが敵の砲火は激烈で、敵機動部隊は難なく中央線を突破し後続部隊が進攻してきた。夜に入っても友軍を上空から照らす閃光弾^{せんこうだん}、耳を覆うような砲火、花火のように飛び交う弾光になすすべもない。まさに修羅場である。

速射砲、歩兵砲、機関銃等の火器では敵の重戦車には通じない。後方小豆山陣地の友軍山砲の轟音^{げうおん}

が僅かに友軍の頼みである。敵の先頭部隊はひるむことなく戦車、歩兵入り乱れて、丘陵の両翼、我が軍の施設した中央陣地を突破し内陸に向かつて進攻、それに続く歩兵部隊は自動小銃を肩に掃討戦である。友軍には相当数の死傷者があり、我が小隊も蝟壺たこつばの中で直撃弾を食らった者、草陰に倒れている者、支離滅裂の状態である。砲声が止み夜の激戦が終わり、夜明けに後方へ撤退して集結した第二機関銃中隊はもはや四十人にも満たない人員である。山合いの谷に集結した中隊は既に戦闘能力はない。重機、大隊砲は分解し、僅かな弾薬とともに交代で搬送することとなった。食糧も乾パン二袋が配給されたのみである。道もない山坂を黙々と空腹に耐え、流れる汗を拭きながらの撤退である。我々にはもちろん目的地も分らない。撤退を始めて二日目、極度に疲労し、重機関銃等重いものは遂に地中に埋めることとなり、敵と遭遇した時は敵に射殺されるか、手榴弾で自爆するかのほかはない。いよいよ死を覚悟しなければならぬ。現在地がどこかも分らないこの山中で、食糧もなく、隊をはずれたら、あるいは斃たおれたらおそらく生き抜くことはできないであろう。

ここで死んだら家族や肉親には死亡の場所も日時も、もちろん骨、遺品も届かぬこととなる。配給された乾パンも既になく、胃袋の中で水が歩く度に音を立てるのみ。道なき山や草原を夜となく昼となく彷徨ほうこうすること何日か？ 恐らく戦闘の日から一週間以上は経過しているであろう。近距離にソ連兵が駐屯しているらしい。既に疲労困憊ひろうこんぱいに達した我々は遂に今夜敵陣に切り込んで潔く戦死しようとのことである。降り出した雨は止みそうもない。草も木も、そして全員禪ぜんまでびしょ濡れである。

夜ともなれば寒さも加わるが、睡魔は疲れた体に容赦なく襲ってくる。背丈ほど伸びた丘陵の草中に点々と打ち伏しながら指揮者の命令を待った。もう考えても仕方がない、死あるのみだ。

それから幾時間がたったのだろうか？　ふと目を醒ますと周りは明るい。雨が止み太陽の光がまぶしい。俺は死んでいたのではないか？　体を起こしてあたりを見回すが誰もいない。そして確かに俺は生きている、怪我もしていない、夢か幻か。延々と広がる草原にたった一人、全くの天涯孤独、他の戦友は一体どうなったのだろうか。幸か不幸か？　喜ぶべきか悲しむべきか？　一寸先も分からない自分の人生にただ茫然として佇むだけである。

仕方がない、これから先死ぬまで、束縛も命令も受けず、自らの意志と力で生き抜こう、気弱な自分も諦めの境地に達すると糞度胸くそどきょうが出るものだ。太陽が昇り濡れた軍服から湯気が立っている。現在地も分からないが南へ行こう、果てしなく続く丘陵の草原の中に所々灌木かんぼくが群がっているが、耕地も民家もない、手つかずの自然と静寂である。

丘陵を下って凹地くぼちに出ると、獣道かどこかへ通じていると思われる道らしき所に出た。日時も分からない、木の枝の繁りようで南と思われる方に向かう。三〇四時間も歩いたかちよつと平地らしき所があり、草が倒れ何か散乱している。急ぎ近づいて見ると日本兵の野営の跡らしい。何はともあれ散らばっている物をあさった。下着、食器、本と不用品を捨てて行ったらしい。その中に干物の鱈たかを見つけた。三十センチ位か五、六本、数日の絶食、何でもよい、食える物なら食わねばならぬ。近くに

水溜まりがある。流れでなく汚い濁った水だが、今はそんなことはどうでもよい、餓鬼である。塩分を含め切切って食い水で流し込んだ、喉元を通ると胃の中で水を含み膨らむ様子が分かるようだ、夢中である。何日ぶりに大きく膨らんだ胃袋に満足の心境、大の字になって天を仰いだ。白い雲が東に流れてゆく。孫悟空のようにあの雲に乗って日本へ帰れないものかとしばし、^{はなし}嘶の国の瞑想に耽る。青空の下、荒野には物音一つなく人の気配も更にない。満腹とともに力が湧いてきた感じ。こうしてはいられない、遺品の中から岩塩、マッチを探し出し、捨てられていた下着と交換した。幸いにも地下足袋がある、破れた軍靴と替えてこれで足も軽くなった。また出発、行ける所までゆこう、後は運を天に任せるだけである。

日が暮れて数時間、月光を頼りにただ歩く。夜は人目を避けられるし涼しい。疲れた時にはいつ、どこでも寝ればよい。

また朝が来た。水もなく拾った干鰯^{ほしたろ}をかじりながらひたすら南へ、疲れたら休みまた歩く。路傍^{ろぼう}の草むらに日本兵の屍^{しかばね}が放置され、死体は悪臭を放ち既に腐乱している。合掌！明日は自らの死体かも分からない。哀れさも悲しさも恐さも感情も湧いて来ない。既に考える余裕も感傷もない。戦争とはまともな人間には想像もつかないものである。

丘陵の凹間の小道を歩き続けながら考え続けた。何とかして民家か人に会うほかはない。武器は手榴弾二発しかない。たとえ自爆しようが殺されようが、それはその時に解決することだ。食糧もない。

「父よ貴方は強かった、泥水すゝり草をかみ、荒れた山河を幾千里……」、かつて唄った軍歌そのままである。

涼しくなった黄昏時、細い野道を一人とぼと歩き続ける。かすかな月の明かりがあるのみ、夕闇が迫り今夜も草むらで休むかと考えていた時、ふと人の気配を感じた。動物的な勘なのか、暗闇の草むらに伏してあたりを窺った。生への執着はやはり本能か、危険を感じて、全神経を耳にして物音一つ立てないようにして周りを窺う。確かに近くで人の気配を感じるが静かである。ソ連軍なら勝ち戦さであり、機動部隊でこのような凹地の道は通らないだろうし、また集団で騒音が聞こえるはずだ。戦争で離散した日本兵に違いない。手榴弾を片手に静かに静かに近づいた。確かに日本兵である。五、六人か、ひそひそと話している。俄然元気が出た、何日目の遭遇であろう。「日本兵だ！」と声を出した。ぎよつとした数人が立ち上がり誰何した。部隊名と名前を言うとか何とか受け入れてくれた。下士官を長に七人位、鉄鍋のような物を囲んで食事中である。肉と馬鈴薯（ジャガイモ）を塩で煮たものである。事情を話し何とか食事でありついた。この谷間は日本の敗残兵が集まる所らしい。多数の集団で移動することは敵に発見されやすい、戦闘した部隊は既に交戦能力はなく、日本軍は前線ではほとんど敗退している、牡丹江市あたりで集結するほかないと言う。聞けばこの集団は連隊本部の兵という。このような状態でも上官の命は守らねばならない。

地獄で仏の例は一瞬にして消え去った。若干の馬肉を分けてもらい、夜明け前一人でまた逃避行で

ある。命をつなぐ食糧は栄養等関係ない、ただ満腹すれば力が出る。馬肉と馬鈴薯^{パレイショ}で元気を取り戻して、約一時間も歩いたか、今度は向こうから呼び止められた。伍長の襟章に日本刀を持った兵隊と小銃を持った兵二人である。なるほど敗残兵の辿^{たど}る所だと納得した。部隊などどうでもよい、三人寄れば心強い。お互い持ち合わせの食糧を出し合い、行動を共にすることとなった。二人は戦闘していいのか服装も割とさっぱりして、小銃も弾も持っているし日本刀は拾ったと言っている。彼らも、集団行動は危険だし食糧の調達もままならぬ、このまま三人で食糧の調達をしながら敵の目を避けつつ時間をかけて南下しようとの結論に達した。神国日本の絶対の勝利を教育されて来た我々は、東満で敗けても必ず後では勝つという信念がある。それは理論ではなく洗脳された先入観みたいなものである。かくして三人の流浪^{ろうろう}が始まった。

「慌てるな、死を急ぐな」何とかして生き延びよう、三人の思いは同じである。一日歩き草むらに寝て、翌朝小高い山の斜面に耕地らしき所が見える。きつと民家があるに違いない、周囲を警戒しながら向かった。近づくにつれ民家らしきものが見えて来た。青々とした畠^{はたけ}に近づく^{ツキ}と西瓜^{スイカ}畠である。未熟の小玉が転がっている。帯剣で割ってかぶりついた。甘くはないが水分補給と胃の充足に何よりである。小さな農家が五、六戸点在し、下った所にせせらぎが流れている。静かに恐る恐る近づいてみたが一向に人の気配はない。戦乱に練れている民衆はいち早く荷物をからげて避難したのであろう、空っぽの家には荷物も何も残ってはいない。果たして人が住んでいたのだろうかと思ひやうである。

全部物色してようやく発見収獲したのが、唐きび、馬鈴薯パレイシヨの残り、散乱した高粱コウリヤンの実、取り残された味噌、最後の小屋で子豚が一匹逃げ遅れたのであろう、銃殺。戦果は十分である。

早速谷間の小川のほとりで炊飯、豚肉入りの食事は久しぶりである。慌てることはない、体力こそ生き延びる基である。小川で体を拭き下着を洗い、少時の憩いのときである。食事と自由、三人での行動はやはり楽である。夕刻、残飯は容器に詰め山に潜伏、常に警戒を怠らない。夜が明けると集落を訪れ食糧を調達、不定期ではあるが何とか胃袋を満たし、夜は山林に潜伏を続けて数日間の逃避行が続いた。希望は薄い、思いのまま行動できたこの数日間が今考えれば最も幸せだったかも知れない。

ちよつと小高い丘の上に出た。遙はるか草原の彼方に道路が見える。トラックらしい車が砂塵を巻き上げながら疾走しているようだ。きつと街が近くにあるらしい。このままの逃避行は少々不安である。戦況は如何？ 現在日本軍はどの辺で交戦しているのであろう。国境や東満地区の敗戦は想像できるが、あとは皆目分らない。この日には既に日本は無条件降伏、敗戦の詔しよくちよく勅が放送されていたのだが、我々は知る由もなく、大本営発表、祖国の勝利、本土決戦、かたくなにもそれを信じ続いていたのである。

とにかく本道に出て街に近づこうと決めた三人は、微かな希望を求めて山道を急いだ。本道に近い凹くぼみに数人が屯たむろしている。確かに日本兵である。近づいて見ると何と我が中隊長と本部付の兵数人で

ある。草薙中尉ほか下士官、兵、いずれも軍服も破れ顔中髭だらけの姿は容易に見分けがつかないほどである。入隊以来三カ月余り、初年兵の我々は直接話す機会もなかった軍隊生活であり、相互にそれほど親しみもないが、一応軍律である。自ら申告して隊に加わることとし、共に行動した二人と別れることとなり、必ず生きて日本へ帰ろうと誓い合った。二人は名残りを惜しみつつ、いずこへか去って行った。

私は昭和十五年旧制中学に入学、一年生の時から靴の上にゲートルを巻いて登校、軍隊の基礎訓練から野外戦闘訓練まで正式の教課として受け、更に軍人精神で洗脳され続けた学生生活であった。今では想像もできないことであるが、ただただ上官の命に服従することのみ、自分の意志で行動することはできないと教わった。中隊長の指示により一同は街へ通ずる大道へ出た。

隊伍を組むまでもなく、疲れ切った日本兵があちこちからこの道に出て来る。傷ついて路傍にうずくまる者、道端に伏している者、集団に遅れ歩いて行く者、皆自分の体力の限りを尽くしている。もはや軍隊でも組織でもない。他人のことを考える余裕はない。どうなるのか分からないが何となく同じ方向へ歩いて行くだけである。市街地が見えてきた、牡丹江^{ボタンコウ}であろう。ソ連兵数人が自動小銃を構え将校と共に車で来て停止を命じた。既に戦力は皆無である。通訳が告げる「戦争は終わった。日本兵は集結して日本へ帰国させる。これから武装解除をする」とのことである。

戦争は終わったんだ、そして生きて日本へ帰れる、安堵と熱い思いが込み上げてきた。ソ連兵の監

視の中で小銃や帶劍、すべての兵器が路傍にうず高く積み上げられた。かつて權威の象徴であつた日本刀、その中には宝刀、名刀もあつたかも知れないが、芝居小屋のごとく無残にも積み重ねてある。そしてまた腕時計、万年筆、眼鏡まですべての持ち物が押収された。逃亡を予防するためだと言われたが実は略奪である。武装解除を終えた後は完全なソ連軍の支配となる。西部劇でカウボーイが牛の群れを牧場に追い込むのと全く同じである。自動小銃を突きつけられ員数を点検するのみ、誰彼の区別なく何人かを集団にして追い立てられた。かつて勇名を馳せた関東軍の志気も皇軍の誇りも今はない。屠所に曳かれる憐れな羊同然である。ソ連軍の指揮下に入った以上勝手に休むこともできない。若いソ連兵の怒声罵声にせき立てられつつ数時間歩かされ、到着したのは掖河の旧日本軍営舎である。二段ベッド式の営内はすし詰めで空間はない。集団には顔見知りの兵は誰もいない。混乱の中でただ人員を合わせて集団が編成されただけである。終戦、いや敗戦は分かるが未だ無条件降伏は知らない。烏合の衆は指揮系統も分らないが、階級章等も勝手に自分で昇進している者がいるらしい。不定期に配られる食事ほとんど高粱や唐きびの粉のスープで、先を争わないとありつけない。屋根のある家で寝られるのがせめての慰め、何と憐れな生活であろう。八月九日ソ連と開戦以来、逃避行を含め約二十日間、一度もまともな食事等しことがない。疲労と栄養不足で日毎に体力の衰えを感じる。せめて何でもよい、満腹できればと願う。

このような劣悪な条件の下で十数時間を過ごした。情報や噂は広がるが真実は少しも分らない。

開拓団の女性で頭を刈り軍服を着て紛れ込んでいた人が発見されソ連軍の将校に拉致されたとか、脱走を試みて射殺されたとか、誠に悲惨な噂が飛び交う。帰国を夢見て隠忍自重するほかない。

九月も下旬か、帰国の輸送が始まったと情報が流れた。事実であろう、千人（後で分かった人数だが）位隊列を組んで営舎を出発している。我々にもその時がついに来た、辛かった営舎よ、さらば！ 駅に向かつて進んだ。真つ黒の有蓋貨車が二段に区切られ、足を伸ばす隙間もないほど押し詰められて乗車した。駅で待機している兵隊が大声でわめいている。願望が高じて発狂した者で、ここまで来て射殺されるのではと胸が痛む。貨車は上段に小さな覗き窓があるのみ、入り口を閉じ外から施錠されると中は暗闇である。でも少しでも早く乗車できたことを神に感謝した。

ようやく汽車は駅を離れた、進行方向は南満や南鮮と反対である。誰かが、汽車はシベリア鉄道を走りロシアの日本海に位置するウラジオストク港から帰国するのだろうと言う。戦争は終わったんだ、なるほどと納得、鉄道を走る音に夢を託した。疲れきった体はじっとしていると忽ち眠りに落ち入る。うずくまった体は身動きもできないほど窮屈である。身を寄せ合いながら何時間走ったことだろう。確か国境の街満洲里は夜中に通過したようだ。停止した車両の扉が解錠され線路に降りた。駅か何か分らない。一面の草原に涼風が吹き、遠く白樺の林が点在する。あたりには民家も耕地もなさそうだ。時間も、またどこをどう走ったか分らない。線路わきの空き地で炊事、相変わらずの食事と水分を補給し、草むらの中で排便を済ました。ふらつく足を踏み締めて再び車中におさまる。車

両は西へ向かつているようだが広い広いシベリアのことである、そのうち曲がり曲がりして東へ向かうだろう、如何ともし難い。

再び夜が訪れ列車は走る。翌朝、二階にいる者が相変わらず列車は西へ走っていると云う。代わる代わる覗いて見たが朝陽に対し確かに反対である。車内が騒然となった。そして誰もが沈思黙考、会話も途絶えた。「万事休す」、騙された。我々は捕虜としてソ連に連行されるのだ、もう帰れない、銃殺か奴隷であろう。自らの愚かさの不運にかすかな夢は無残にも打ち碎かれ、暗い谷底に突き落とされた気持ちである。ソ連兵の嘘つきめ、怒ったところでどうにもならない。神よ！ 神よ！ あれほどの苦難に耐え、生きて祖国の土を踏むことを夢見て来たのに！ 脱走しておけばよかった！ 力から抜けてゆくを感じた。

それから数日間、列車は西へ西へと走り続けた。途中の駅にはロシア人がいるが、見よう見まねで日本はどちらかと聞くと、日本は反対だと言う。何回尋ねても答えは同じ、益々確定的なものとなった。遂に下車する時が来た。駅か何か分らない。失意と体力の消耗で歩行さえ辛い。ここから数キロ歩くと言う。身回り品は何も持たないが、貨車に閉じ込められた数日間足はふらふら、監視兵の怒声に追われながら歩くのが精いっぱいである。見栄も誇りもなく憐れな姿の醜態である。

到着した収容所はにわか造りか、白樺林の中を切り開いて有刺鉄線で囲んだ土地にサーカスのような大きな天幕が建てられ、門柱は材木である。ソ連兵は掛け算が不得手とみえ門に一人ずつ数えて入

れる。幕舎内は二段式で少しばかりの乾草が敷いてあるだけだが、足を自由に伸ばせるだけ貨車よりましである。疲労困憊^{ひろうこんぱい}に達した体を横にして死人のごとく瞼を閉じる。一寸先の運命も分らない自分^{自分}にただ涙が溢れ出るが、拭くのも面倒でいつの間にか眠りに入った。

翌朝広場に整列、班毎に四列に並んで点呼。報告するが、ソ連の将校は納得できない。暗算の人員点呼ができず、門を出入りして数えるのがやっとで時間のかかること……。

身体検査、上半身裸でズボンを下げ、尻の肉をつまんで等級が分かれ作業区分が決められる。六十キロ近くあった体も約二カ月で四十キロを下り、骨と皮ばかりである。検査の結果は最低の五級、収容所の軽作業と判定された。一く三級は立木の伐採である。かくして自由の束縛、強制労働と、奴隷と同じ抑留生活が始まった。地図もない、地名さえも分からない。ただシベリアの山奥で命の保障されない生活がこれから続くのだ。

食事は相変わらず高粱^{コウリヤン}、唐きびの粉、時折アメリカ製の肉缶を混ぜたスープにほんの一切れの黒パンが配られるだけ、質も量も体力を保つことはできない。北海道・樺太方面から持って来たニシンの樽詰めで生のまま一匹が配られることがある。もちろん塩漬けで、完全に骨まで塩分と共に煮て吸収する。薄暗い宿舎では誰もが煮ているので、手を放すと既に盗まれている。まさに餓鬼道の世界である。

十月末、既に寒気は迫り、特に夜は寒い。斜面に穴を掘り天井を土で覆った宿舎が構築され、中央

にドラム缶のペーチカが置かれた。栄養失調、アミーバー赤痢の発生で毎日数人の死者が出る。栄養失調の体は老化した肌と同じ。あぶら気がなく、心も喜怒哀楽が激しく子供のようである。隣に寝ていた友が一声もなく朝は冷たい死体となっている。そして明日は我が身か、考えるだけでも哀れである。

いよいよ冬將軍の到来、満州にいた者さえ想像を絶する寒さである。鉄棒を使つての大便小便の破壊作業、屍の埋葬、尖った鉄棒、十字鎌も容易には凍土には刺さらない。これも五級者の軽作業である。

十二月中旬、激しい咳と高熱で苦しんだ。診断の結果は分からないが恐らく肺炎ではなかったろうか、安静就寝を言い渡された。二日後、本部収容所に移送すると言う。この収容所で既に百人近くの人死亡したことだろう。その人の名も出身地も分からない。衣服まではぎ取られた裸の屍が数日おきに墓地でもない林の中に埋葬された事実は現世での地獄図である。いよいよここで斃れるか、仕方がない。

少し熱も下がったようである。二日目に移送された収容所は鉄道に沿った集落が散在する大きな収容所である。収容所入り口には衛兵の詰所があり数人の兵が配置されている。所内は広く幾棟かの兵舎が建っている。久しぶりに屋根と床があるまともな家に入れるらしい。相当数の兵が収容されているらしい。連れて行かれた部屋は病人ばかりだ。病院ではないが二段ベッドには藁蒲団が敷かれ、一

枚の毛布が置いてある。凍傷や作業中の怪我人らしい。ピロビジャン収容所と聞く。馬鈴薯パレイシヨやコーン、肉片や油の浮いた実のあるスープ、食事は以前の収容所に比べ大きな黒パンが支給された。それでも空腹は満たせないものの、少しは力がつきそうだった。幸い病氣も日ごとに治り、時に収容所内の掃除等に駆り出されるほどとなった。ビタミンCの補給と称し、ビア樽に松葉汁が造られている。診療所に行っても薬品、医療器具は少なく心細い限りである。しかし、あの寒さと酷寒から逃れたことは幸運と言わざるを得ない。

数日目に入浴に連行された。衣服はシラミ駆除のためすべて熱気消毒、桶一杯の熱湯で洗面から体を洗うまですべて済ませねばならぬ。思えば八月九日戦闘体制に入って以来五カ月目、初めてまともな入浴である。入浴を終えて全員陰毛を剃られた。これもシラミ退治とのこと、誠に不格好な姿である。垢あかを落とした体に消毒された温かい衣服、生き返った気持ちである。帰路、日本の将校団と出会った。彼らは服装も立派で元氣そうである。「体を大切に頑張れよ」と激励の言葉を受け、ほっと温かい気持ちに返った一時である。近くに将校団収容所があるらしい。

食事と静養、若さもあり、日毎に体調は回復してきた。時々休日があり、収容所内で慰安演芸会が催された。非戦闘部隊や特務機関の関係者もいるとのこと、背広やネクタイ、支那服まで揃っており、盛大なものである。見事な演芸や歌や踊りで現状を忘れて笑う一時もあった。

三月も下旬、シベリアの冬はまだ寒い。しかし少しずつ春の陽ざしを感じる頃、元氣を取り戻した

数人が呼び出された。移動のための準備をせよとの命令である。再び作業隊に戻されるのか恐怖に似たものを覚えた。やむを得ない、全く自由を奪われた虜の身でどうにもならない。不安に満ちながら翌朝、監視兵に付き添われこの収容所を発った。

片言ながらソ連兵とも多少意思の疎通ができるようになった。聞くとところによると、ここはハバロフスクよりシベリア鉄道沿いの西にあるピロビジャンという街で、次の駅の近くのピラカン地区にあるコルホーズ農場の収容所に連行することである。

線路に沿って何時間歩いたろう、雪に覆われた広野はどこまでも広がり、相当の距離である。列車の数も少なく、満州から収奪した戦利品と思われる物資を満載した列車と一回ほど遭遇した位である。目的地ピラカンが鉄道の土手から左斜面に川を隔てて家屋や耕地らしき平地が見えて来た。駅周辺には右斜面に民家が点在しているが、街にしては小さい街である。百メートル位か、凍った川を渡り官舎らしき建物前の道路を通り収容所に到着した。門の先に衛兵所、診療所等の建物、広場の両側に収容所が二棟、有刺鉄線を境に外は耕地のようである。日本人約百人、ドイツ人捕虜五十人位が別棟に収容されている。作業は薪用の木材収集、健康回復前の中間収容所らしい。翌朝、ドイツ兵の朝の点呼を見た。体軀も頑健で服装も整然と行進する姿は実に堂々たるものである。ゲルマン民族の誇りを持ち祖国の復興を信じていると言う。映画で見たヒットラーユーゲントの勇姿を思い出し、我々も元氣を取り戻さねばと思った。しかし彼らと同居する期間は一カ月位しかなかった。

雪に覆われた山で倒木や伐採した大木を集め、凍った川を馬で搬送する作業が続く。ペーチカ用の薪は容易に確保でき終夜暖房もできる。同行のロシア人や行き交う民間人も人なつっこくて親切である。たばこ、巻紙、松の実、ひまわりの実と惜しみなく袋をはたいてくれた。彼らの中には思想犯で、ソ連邦各地からシベリア開発のために送り込まれた者がたくさんいると聞く。人が人を支配する。彼らも犠牲者の一人である。風が吹けば体感温度零下五〇度を超す。足指を動かしていないと凍傷になるといい一応作業は中止である。隣の福岡県出身の先輩N氏が何かと面倒を見てくれ、酷寒の冬も大したアクシデントもなく越冬することができた。

春はほんの一時、一斉に草木が萌え出たかと思うとすぐに短い夏がやってくる。胡瓜^{キュウリ}、キャベツの収穫期を迎えた。朝夕のブヨの襲来は激しい。大きな虫が目鼻耳ところ構わず刺し、その音とともに気が狂いそうである。でも食いながらの作業で、飢えを満たしビタミン補給に最高の仕事である。馬鈴薯^{レイシヨ}の収穫、これまた満腹するには最適。休憩時間には焼芋数個、更にズボン、袖等に隠して持ち帰りペーチカで焼くことができた。食べられる草、湿地の蛙と、すべてが生きるための基となる。収容所を出ての農作業では解放感と自由を味わい、監視兵とも親しくなり、外では少々のこととは見逃してくれる。

このような信頼の中で突然大事件が発生した。小隊の指揮官であるY軍曹とその助手役であったN伍長の脱走事件である。

Y軍曹以下約三十人位、健康な者で編成され、乾草用の草刈りである。天幕と食糧を携行して約一週間、収容所を離れて作業することとなった。山麓の草原に野営しての作業である。監視兵も数人、白樺林の繁る付近に幕舎を設置した。近くに十メートル位の小川が流れ湖沼が点在する。作業時間以外は山できのこ狩り、河や沼では魚釣り、貝採りと食糧には事欠かない。炊事、洗面、水浴と全く自由な生活である。真つ黒に熟した木の実をつぶし、黒パンのイースト菌を混ぜ入れて果実酒まで造るというぜいたくさである。

しかし、作業終了の前夜に二人は脱走を実行した。国境まではかなりの距離があり、しかもウスリ―江という大河がある。とても普通では考えられないが、関東軍の猛者、中国語もしゃべれるし地理にも詳しく、周到な計画と綿密に用具、食糧も準備していたらしい。状況は一転、監視兵が慌てて全員集合を命じ、行動を開始したのは夜が明けてからである。何も知らない我々は、信用し過ぎたソ連兵にも同情したが、二人が何とか逃亡に成功すればと祈りながら収容所へ復帰した。

空には偵察機が飛び搜索しているらしい。監視兵に怒鳴られ強行軍で帰ると広場に全員集合、収容所長の厳しい訓示である。「二人は脱走したが、一メートル下の地下は永久凍土、果てしない草原と増水した大河を渡ることは絶対不可能だ。必ず見つかるか死ぬかであろう。捕まれば銃殺か強制労働で日本へは帰れないであろう。逃亡等無茶なことを考えず、命令に従ってよく働き一日でも早く日本へ帰るように」と嚴重に言い渡された。自分には逃亡するほどの勇氣も体力も知識もないが、彼らの

ことを考えると身の毛のよだつ思いである。

そして四日目の午後、遂に願ひ空しく二人は捕らえられて收容所に連行される羽目となった。たった五日間の逃亡だったが、両手を後ろに縛られ、破れた衣服と疲労^{しょうすい}憔悴^{しょうすい}しきつて壇上に立たされた姿は誠に無残なものである。同胞である我々には何もできない、暗い気持ちで目を伏せるばかりである。勝者と敗者の力、ただただ衰れを感じるのみ……そのままどこかへ連れ去られたようである。

抑留されてはや一年となる。秋は束の間、十月にはもう寒気がやつてくる。收容所長から呼び出しがかかり、所長宅の手伝いを命じられた。朝牧場までの牛乳とり、家屋の修理、室内壁塗り等である。家族は妻子三人。薪割り、水汲みと忙しいが、作業より随分と楽である。その上、時々パンやスープ等をご馳走してくれるマダムである。会話も何とか通じるようになり、日本の風景、文化等話すと興味深々、物珍しげに聞いてくれる。

穏やかな日々を過ごしていたところ、次は、ほか一人を加えドイツ兵が居住していた部屋を改装して食堂にするからその作業を手伝えと言う。長野県出身で大工左官の経験ありというKは先輩であり、家事手伝いのかたわら助手として働くこととなった。お蔭でこの冬も何とか酷寒から逃れることができる。と安堵の胸をなで下ろした。生石灰を溶かし、長い柄の刷毛で天井から壁まですべて塗装するには相当時間もかかるが、その上に腰位の高さに野菜汁や煤^{すす}を混ぜた塗料で連鎖模様をデザインしたところ、所長がすっかり気に入りに好評を得た。食糧事情も少しずつよくなり、正月は炊事係の方で何と

か正月気分を味わう工夫もされてきた。

第一回の内地への手紙が許された。シベリアの地に抑留されていることも、生死さえ家族は知らないであろう、到着するか否かは分からないが、元気で生きていると書いた。望郷の念は募るばかり、あの空は日本へ続いている。

割と平穏な日々が続いていた三月の初旬、事務室に数人が呼び出された。「東京ダモイ（日本へ帰国）」ということである。夢ではないか、信じられない、元気になった現在、また厳しい作業隊へ転属ではなからうかと疑った。着替え、寝具等身の回り品は何もない、食器だけである。残留の皆にすまないと思いつつも一刻も早く旅立ちが望まれた。

一行はビロビジャン収容所に集結、入浴や下着の交換を済ませ翌日出発と言う。編成された人員はよく分からないが病弱者が多く、自分は元気な方であろう。一年半前完全にだまされて連行された不信感が帰国もすぐには信じられなかったが、帰国の確率は段々と増してきた。余りにも願望が強いだけに失望が恐ろしい。貨車は日本海に面した新設港ナホトカへ向かうと言う。既に帰還列車が数回走ったと聞き、俄然夢はふくらむ。もう裸でもよい、食わなくてもよい、一刻も早く港へと心は躍った。列車は二十数時間も走ったか、ナホトカである。民家もまばら、小さな港である。右側の山が削られ港灣も工事中である。潮の香りが懐かしい。

船待ちの収容所には壁新聞が各所に貼られ、民主教育の弁士が檄^{げき}を飛ばしている。偉大なる同志ス

ターリン万歳、共産党を讃えなければ帰国は許されないと。何としても帰らねばならない。滞留すること一週間余り、ようやく乗船の日が来た。建設中の堤防から栈橋を上り次々と乗船することになった。船には日の丸の旗がひらめき「大郁丸」と書かれた日本字が懐かしい。築港作業に従事している日本人が手を振っている。「体を大切に一日も早く帰国できるよう神に祈る」気持ちである。甲板で日本人の船員と看護婦さんが出迎えている。「御苦労様でした、お帰りなさい」の温かい言葉に胸が熱くなるのを覚えた。夢ではない、助かったのだ、本当に日本へ帰れる。何度も何度も確認した。大郁丸はいよいよ出港、対岸の小高い山が徐々に遠ざかってゆく。一刻も早くこの地を去りたい、悪夢のような一年半、再び訪れることはないであろうと思いつつ感無量である。

海はべた風、^{なぎ}天気晴朗にて生涯忘れることのできない嬉しい帰り船である。船内で食事が配られた。真っ白い米飯に味噌汁、漬物、一年八カ月目の日本食、こんなにもうまいものであったのか。波一つない海原、祖国に続く日本海の航路は誠に順調で舞鶴港へ向かった。

遙かに霞んで見えて来た島、見る見るうちに山や木が鮮明になってくる。竹笹が早春の風にそよぐ風情、祖国はこんなにも美しかったのか、改めて強烈な印象である。

昭和二十二年四月二十六日頃、夢に見た故国日本の土を辛うじて踏むことができた。万歳！ 万歳！

生きていたい、死ぬことは嫌だと心の中に秘めながらも忠君愛国、それが国民の最高の道徳と信じ

て、「予科練の歌」や「同期の桜」「歩兵の本領」等、死を美化し自ら士気を鼓舞しながら戦場へ向かった過去は一体何であつたらう。

人の命、尊厳がこんなにも尊ばれる平和な現在、夢想だにできないことであるが、幾多春秋に富む若人達が未来を信じつつ死を選ばなければならなかつた時代。

そして戦争は、勝者が敗者を裁く時、生殺与奪の権を持つ。勇敢なる戦場物語より、この現実を生涯後世に語り継がねばならない。いかなる美名の下にも戦争による殺戮^{さつりく}は許すことができない。

【執筆者の紹介】

大正十五年九月二十五日生

昭和二十年五月 関東軍入隊

昭和二十年八月九日 ソ連と交戦

昭和二十年九月二十日 ソ連に強制抑留

昭和二十二年四月 舞鶴上陸 復員

昭和二十二年九月 山鹿市役所に奉職

昭和六十三年三月 山鹿市役所 退職

現在 全抑協熊本県連合会鹿本郡支部長

総務省行政相談委員 熊本県会長

熊本県地域福祉権利擁護センター生活支援委員

熊本県市町村退職年金連盟理事

山鹿市老人クラブ連合会理事

として、地域社会で活躍中です。

(熊本県

池上 俊邦)